乳幼児医学・心理学研究 27 (1)：55－56 (2018)

書　評

小林隆児（著）

「臨床家の感性を磨く—関係をみるということ—」

2017 年　A5 判　182 頁　誠信書房　2,500 円＋税
ISBN　978-4-414-41632-9

本書は親子の臨床に関わる準備状態にある学生とすでに日々親子との関りの中で仕事をしている医療・福祉・心理・教育・保育等の専門家すべてに役立つ。

著者は児童精神科医であり，長年自閉症治療に取り組む中で親子の関係性に潜むさまざまの問題に気づき，自閉症にとどまらず，すべての親子のこころの問題をクライエントとともに探索し，気づき，治療する方法を探し当ててきた。その過程で子どもを治療するためには，その子どもを護り育てている親との関係性をあるがままに診ることができなければならないこと，あるがままに親子の関係性を診ることは専門家であるから可能なわけではないという現実を丁寧にわかりやすく，平易な日本語を用いて説明している。さらに，専門性にかかわらず，日常で用いているわかりやすい日本語で親子の関係性を表現できることが親子の理解に必要であると言う。著者は様々な大学・大学院で 3 日間の集中講義・演習を担当してきた。SSP（Strange Situation Procedure）を用いて生の親子の相互作用をビデオ撮影し，そのビデオの観察を通して何を感じたか（情動）を学生に語ってもらい，学生同士と司会者としての著者によるディスカッションを通して親子（ほとんどが母子）の関係性の理解をはかるというものである。著者は学生の感じたことを引き出し，学生がなぜそのように感じたかをふりかえる作業を助ける。その過程で，同じ母子を観察しながら学生によって感じ方や理解のしかたが異なる理由を追求し，観察する学生の情動の動きに着目する。ここに生じる情動は，個々の学生特有のものであることに気づきをもたらし，学生個人の過去の母親との経験を呼び覚まし，その経験に基づいてビデオの親子を感じ，理解しようとしていることを学生自身が表現するのである。その過程で，ビデオの親子のやりとりに関する自身の観察結果がなぜそうなったかを洞察できる。このような過程が，親子の臨床に関わる専門家の感性を磨くことにつながる。

さて，この授業で用いられているビデオは，Mary Ainsworth によって開発された SSP による母子の分離と再会場面を撮影したものである。この場面では，母親が不在になるという，子どもに中程度の threat（脅威）を与え，その脅威に子どもがどう対処するか，子どもの状況認知のしかた（cognition），情動（affect），行動を観察し，対処の仕方によってアタッチメントのタイプを分類するというものである。子どもがどのようなアタッチメント行動を示すかは，母親との関係性によるものである。著者の演習では，ビデオに映し出される母子の関係性を学生がどのように感じ，理解するか，そしてその理由は，を問うものであり，対象母子のアタッチ

メントタイプを確認する作業は行われていない。したがって，答えのない作業であるだけに，著者のように長年親子臨床において診断と治療にたずさわり，かつ高度の専門的知識をもつ人にのみ可能な教育手法ということになりかねない。学生の理解が適切なものかどうかを判断できるのは著者のみということなのであろうか，という疑問が生じる。親子の関係性のタイプを問うことは，善悪や正否を問うものではない。しかし，親子の関係性を分類することで，親子の毎日の生活にどのようなことが生起しているのか，さらには親が過去にどのようなことを体験しているのかを，ある程度のガイドラインに基づいて洞察を進めることができる。それがSSPを用いたアタッチメント分類であり，親子の関係性理解の方法であろうと考える。特に言葉を持たない乳幼児の発達段階に応じた行動や情動表出の理解は欠かせない。Ainsworthの弟子であるPatricia Crittendenは，乳幼児の情動や行動を詳細かつ具体的に定義して，それらの行動が母親との相互作用でどのような意味を持ち関係性を形成しているのかを説明したアッタチメント分類を提唱している。ここでは詳細を述べることはできないが，私は，Crittendenによる乳幼児と親の関係性をアセスメントするSSPをはじめとした尺度講習会を数回受講した経験を持つ。そして著者が指摘するように自身の経験，知識，情動を通して親子を解釈するため，適切にアタッチメント分類ができない多くの経験をした。私だけが持つ親子を観る「眼」を，一定のガイドラインにそって適切に親子の関係性を理解できる「眼」になるには困難を伴い，いまだその「眼」を修得してはいない。そのため，著者が日本人としての深い臨床経験と熟練のスキル・洞察，そして高度な専門知識に基づいた乳幼児と親の関係性理解を適切に遂行できるガイドラインを日本の専門職すべてが習得できるような著書をさらに世に出してくれることを待ち望む。

（廣瀬たい子）